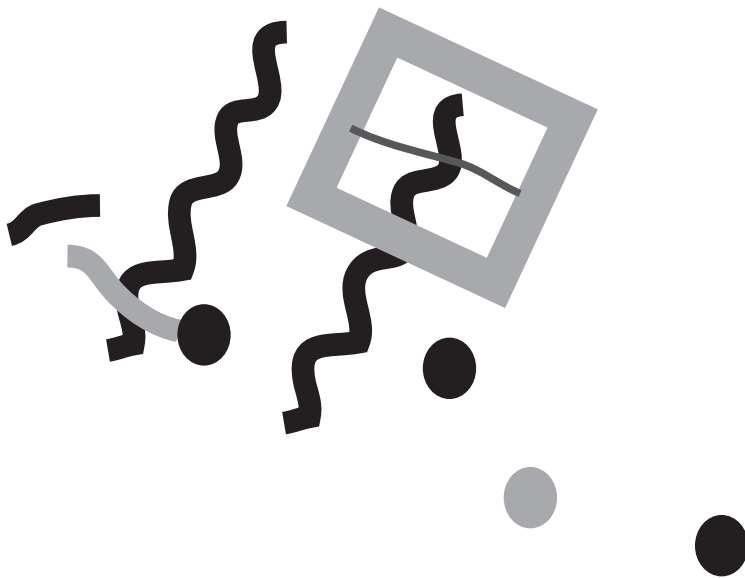

月 刊

Mélange

VOL.77



2012.12.02

詩・エッセイ

月刊『Mélange』VOL.77★

2012/12/02

月刊めらんじゅ編集部

「月刊めらんじゅ」77号目次

詩・俳句・川柳

夢三篇……………岩脇リーベル豊美 04

御霊……………川田あひる 05

トウオネヲ河……………寺岡良信 06

出帆……………野口裕 06

水の仙人……………にしもとめぐみ 07

無口な死体―川柳連作……………情野千里 07

さくらん……………大橋愛由等 08

キハクなわたし……………中堂けいこ 09

ささやかなひかりまでがするすると溶けていく……………福田知子 10

災厄にさいなまれ……………有時秀記 11

返詩(KAESHII)⑦⑩……………大西隆志／富哲世 12

坂の町の冬―五十六年目のCへ……………安西佐有理 15

エッセイ

新連載 〈詩人通りより／1〉「協働など」……………岩脇リーベル豊美 03

神戸詞あしび(二〇句選に現れた詩人たちの個性)……………大橋愛由等 16

詩人通りより／

協働など

岩脇リーベル豊美

月刊『めらんじゅ』に随想をとのご厚意を編集の大橋愛由等さんにいただいていたから久しい。十月に新学年が始まりその職場は新規契約でもあつて、書き始めてはいたのだが、タイトルも決められずにいたり、うつかり期日を失念してしまつていたりして、どこもかしこも年末ですね、という意識が頭奥に引っかかる師走から始めさせていただくことになった。ひと月の思考のまとめとしての便りとのことで大変光栄にも思い、また集中して思考することから故意に遠ざかつていた本年を顧みて、至るところが引き締まる思いでもある。

新しい職場といつても馴染みはあるが、昨年からはエアランゲン大学に Japanologie の学術研究員として赴くことになった。エアランゲンは現在、居住地のヴェルツブルグと同じくバイエルン州およびフランケン地

域に属するものの、列車で通うと片道一時間半から二時間ほどかかる。もともとはプロイセン国に統治されていて駅に降り立ち駅舎を出ると目の前にはユグノー派教会が聳え立ち、カルヴィン宗教改革の痕跡も見られたり、大学通りを上つてゆくとフリーメーソンロッジに行き当たつたりする土地柄である。行き交う人の言葉もプロイセン風の硬い発音が耳に留まり、町全体の佇まいや学生の気質も、カトリック教会の強いバイエルン州とは思えないというのが、駅と研究室の往復のみで得られたこの町の印象である。観念論者フィヒテが一年講義をしたことや、弓道のヘリゲルや哲学的人間学のプレスナーもいたことから散策を試みたいが未だ至つておらず、よろしければのちに報告させていただければと思う。

欧州は日本に比べて高緯度に位置しているので、この辺りでも夏は驚くほど日が長く、冬は気がつくと思

れている。朝とは名ばかりで、星も月も煌々と耀き物音が響き渡る早朝に家を出る。まずゲルトルトの詩人通りでバスに乗ると、切符を見せる度に Danke Dir とか Einen schönen Tag! と挨拶してくれ、障害者の乗客には、今日も・・・に行くの? と話しかけたりする運転手が清々しく、耳が喜ぶのがわかる。もう一本遅くても間に合うのだが、この冬学期から通勤の出発時刻はこれと決めている。先日は一番前の座席に陣取つていた姉弟らしい二人の子供が、なんで停まるの? / 一応ここが最終駅だからさ。すぐ出るよ。もうどれぐらいドイツにいるの? / 一カ月前から / ええ、どこから来たの? / マウリチウス / ドイツは寒い? / Ja, という会話が耳に飛び込んできて一瞬寒さを忘れた。電車のなかでは、ドイツ人はよくするが、林檎やバナナは勿論のこと朝食にと準備したであろう皮を剥いただけの人参やセロリを齧る音が後方から聞こえてくる。これは林檎の音ではない、胡瓜でもない、後ろを振り返つて確かめたい衝動に駆られるが辛うじて押さえ、どの野菜だったのかわからぬままでもあつても、一緒に齧つたような気になつてきて楽しい。エアランゲンに着き、駅とバス停の間にあるパン屋でパンを買うこともある。小さい財布には昨年下賀茂神社で授かつた鈴がつけてあるが、トルコ人と思われる売り子さんがすぐに聞きつけて、あなたの国ではそういう慣習があるのか、と訊いた、お金がジャラジャラ鳴るみたいな。そういうつもりではなかったが、知覚が彼女の表情と相乗して生み出す効果というのは面白いと思う。

こんな些細な日常のなかで協働 Synergie とも称されるホーリズム Holismus とはいわゆる効果が認められるのか。生物、物質、力などの働きが全体として作用して、アリストテレスの叙述「全体は個々の総和以上

のものである」にもあるように、自然科学や経済効果の領域だけではなく、言語や認識のそれでも歴然としている。意味論における相乗効果とは、個々の語や文の意味の変化が、言語体系全体の文脈でのみ意味をもち理解できるとする立場である。個々の語や文の意味の変化は言語体系全体の変化と連動して起こる。ロマン主義自然哲学に遡ると、機械論の問題点から自然の全体的認識を目指したシェリングの有機的組織化 Organisation の概念などにもうかがえる。そんな通り道を、わたしは全体的文脈のなかでパンを齧りながら歩いているのだと思つた。

キリスト教の教義では、ジュネルギアは神の恩寵と人間意志の協働であるとされる。宗教改革当時、ルターに傾倒しプロテスタント教会の体系を築いたとされるメランヒトンにはルター派の信仰告白である『アウグスブルグ信仰告白』およびその弁証を執筆した。ローマ教会だけではなく、厳格なグネジオ・ルター派もメランヒトンおよびその子弟たちを協働論者であると非難している点は興味深い。ルター派の教義を絶対的に支持するグネジオ・ルター派の教義は、人間の自然意志というものは弁証において神との連携は不可能であるということに固執したためであるが、メランヒトンは人間の世俗的行為での自由意志を認めたいうえで、「精霊の恩恵と協働なくしては人は神に応え得られないであろう」という立場をとるのである。

以前から福音主義やユグノー派に関心はあつたが、わたしはカルヴィン等も殆ど知らず入信も考えたことはない。エアランゲンを歩くようになって、未だこの町を俯瞰するまでには至つておらず、それでも何か協働してくれただのか、どちらかというと「縁」があつたのかというところで、ひと月および一年のまとめになつてしまった。夏が終わりがけとスーパリーなどの店頭に並び始めるレープクーヘンやスペクラチウス等のクリスマスのお菓子も、先月までは齧る気もなかったが、待降節が近い霜月というだけでなぜか聖誕祭の味がしてくる。

◆夢三篇

岩脇リーベル豊美

ふと目をあげると朝ぼらけの草原が広がり
地平線を薄明るく照らしている

死人を追いながらも
一別來の絵を描いてみたいと思ひ至る

いつも言葉を書き留めるデューラーの犀の手帳を取り出すけれど
黄色の色鉛筆が見当たらず三色ボールペンでかろうじて
地平線を青黒く牧場の柵を赤紫にそして
未だ昇らぬ太陽と並木を真珠色に塗り詰めることができた

わたしの庭が戦場となり騎馬が駆け抜ける
壮大な朝夢のあとだから橋は崩れ
一切が濃い靈気に慙いでいる

黒髪の女性が長い時間をかけて
膝まで編み上げた黒い靴は

名も知らぬ町の夜雨に安らいでいる

わたしは憚ることもなく見つめていた
彼女もそれを気にすることなく編み上げていた

その手は死んだ魚のように煌きながら翻り
深い水のなかに沈んでゆくが
海底では役割を果たした貝殻として
異端の夢を欲しがるのである

まるでわたしの部屋からついてきたような
短い毛糸の屑が遠い駅の階段に一筋落ちて
人混みにもかかわらず立ち止まり手にとると
後方の乗客が急ぎ足で迷惑そうな顔をするが
拾わずにはいられなかった

この落とし主も生成りの毛糸で
鹿の子模様の毛布を編んでいるのだ

待降節も振るえる霜月
見知らぬ次元を通過する時間相に
紡ぎこむ喪の Träumerei

◆御霊

川田あひる

あまやかな夢の
死の
ハンガーに
ぴくり
翼を
ひるがえし
飛び立った
分身よ
黒波
灰波
紫波
しじまの彼方
わたくしが
一つ
仏を

投じた
彼方へ
とどいたか
死の間際
一瞬に
わたくしの御霊は
とどいたか
こくこく
乳を吸う
赤子が
高く
昇り
闇を
照らすとき
耳をそばだてるわたくしの
ひたいに
帰りきて
白く
鳩が
とまる

◆ トウオネラ河

寺岡良信

連弾の一人は黄泉の明かり曳き

麻醉医のサティーの笑みよエーゲ海

縫合の痛みに触れて星の息

洗骨や石器時代の朝焼けに

夢冷えてトウオネラ河に橋はなし

◆ 出帆

野口裕

滝という滝がモグラを叩き

叩かれ叩かれとつ捕まる

とつ捕まったモグラは水になり

とつ捕まえられた水はモグラの種を宿す

万物流転か異界への貴種流離か

底冷えのする会場で見た墨絵はカボチャだった

ごつごつした野菜の肌に白が陥入し

墨の境界を軽々と飛び越え

白が墨と群舞や乱舞し…

ようこそ隠れ家へ

今日、少年は転校した

古老はただ

Bon Voyage !

と叫ぶのみ

◆水の仙人

にしもとめぐみ

花々がまだ眠っている
静まり返った十二月の庭に
足下に ジャンヌ・ダルクの
緑の剣を地に立てる

オシロイバナや苗代苳のように
そこら中広がって はびこったりはしない

自分の場所ですつくと伸びて
色のない庭に静かに咲くのです

ナルキッソス

報われぬ恋である

水の仙人 静謐の人よ

長い冬のはじまりを告げて
ふさぎ込んだ暗い部屋にも
カップ一杯の喜びを届けてくれる

何も良いことが見つからない
寒い一日にも
私はここにいます、と

◆無口な死体――川柳連作

情野千里

悪いお口がひとおつ消えた六口島^{むぐち}

魔が差して死ぬんだ西の悪党も

仏壇をきれいに拭いて死ぬ死体

雲脂^{ふけ}掃い鯨は石棺に沈む

葬列のぼつけえきようてえ貌ばかり

鬼喰うて口が酸っぱい椿姫

角折つてごめんごめんと失せにけり

ブラジルで花火が揚がる七七日^{ななぬか}

◆さくらん

大橋愛由等

牛追いで岬にたどりつくとなあなたが船を燃やしていて／世界の果ては術語的ありようで満ちているとすれば／海洋学者はアカウミガメからの密告に耳をそばだてていて／ジュゴンたちはもう呪謡を想い出させないと哭いているさなかに／死者を乗せた難破船と死者が不在な難破船の数をかぞえながら／鯨の屍肉が落ちていく深海にはダンデイズムがあり／人食いカマスたちはただひたすら北上してゆくから／戸外にはミクスチャーがたくさん落ちていると聞き及び／野辺に咲く蘭を抱いて御堂に向かうと／老いた男娼を描いた映画が今朝克蘭クアップしたその日に／身を裂く乱世に猫ちぐらは必要であろいかと／アゴラで語り合うには風裂く卵生が似合うのだから／いつそのことばくの墓標を刻むフォントをあなたに撰んでもらえば／どうせ誰も相談相手になつてくれないから／でもどうしてあなたは船を焼くのだろう／百坪の更地が杜になるまで待つつもりはなく／メドゥーサはそういえば難破船の往復切符を持っていなくて／不全なのよきつと牛も屍肉も男娼もなにもかも／せめて陶器片にかなを書く時ぐらいい話しかけないで／男娼の転居先は赤石の中であつたので／ネオニコチノイドを持ち歩くあなたはその石を知っているだろうと／やはり話しかけないでほしいの／あなたもぼくもきつと翳を割く欄外でいきっていくのだろうからと／水玉ほくろを撫で撫でている

◆キハクなわたし

中堂けいこ

雲間から日差しがおりて川向こうの空に、くつきりと山の稜線が見える。見覚えのあるどこかしら懐かしい感覚にとらわれる。わたしをとりまく人々の顔立ちが白くあらわれ、だれかれと見覚えのある懐かしい人々のようだ。わたしを集団に誘った一人は中心人物らしく、今は皆が河原の枯れ草や落ち葉の重なつたあたりに腰をおろし、だが視線は相変わらず川面に貼り付いて、光のせいでまぶしそうに下瞼をすぼめている。誰だったかほとんども思い出しているのに、名前やどんな知り合いだかがわからないでいると、中心の人が振り向いてわたしに微笑みかけた。上体を右向きによじって顔に斜めに光が射している。(あ)思い出した。写真の人だ。ブロッソンのポートレイト風の一枚にあった、河原で男と女が腰に腕を巻きつけながら後ろの写真機を振り向いている、空いた手にワイングラスを捧げて、楽しそうに恥ずかしそうに笑っている二人。特に女のほうは肥満でわき腹と腰に贅肉の段が露わになって、こちらも笑いに釣り込まれてしまう、そんなフLEMワークだ。あの女の人だ。途端に記憶の写真はモノクロから天然色オールカラーに変化する。黒い液体は真つ赤なワインになる。はたしてわたしの目の光景は白いハイライトをまとっただけのモノクロームに変わってしまった。

お揃いの灰色つばい服に身を包んで、いつの間にかわたしも同じ格好で座っていた。川の対岸から小高い丘のあたりまでススキが茂り、いつせいに同じ方向に穂を垂れて銀色の原っぱになっている。風に乗る雲の千切れのような浮遊物が飛んできて、それがススキの種であるのがわたしの服に付着してわかった。まだ枯れススキにはなっていない美しい銀波の原であるが誰も見ようとしめない。みんな身体ごと薄くなつてすんなりしている。

◆ ささやかなひかりまでがするすると溶けていく

福田知子

尾てい骨に赤色の玉 丹田に金色の玉

双子の姉妹がグラウディングする

地底に降りしていく 糸 三十三数え

地底の小石に結びつけ

ひかり 引き上げ ひかり 引き寄せ 地底と結ぶ

天と地 地底と天空は結びあい 溶けあう

ひかり降るごとに黄金色に染まるの木々

あめの向こうに浮かびあがる

ひとかげ 木々 樹々 きぎ キギ

ひかりを深呼吸し 姉妹はグラウディングを終えた

吸いとられるのが怖いから吸いとる

せつない授受の時代は終わったはず……なのに

地上 コンクリートに靴が溶ける

夕刻になると溶けはじめる 靴 こえ からだ

携帯に届く苦しい声 きれぎれの声 ひきずり
のろのろとスタバで煙草を一服

烏丸通りを行き交うひとびと

鮮やかな色のチュニック スパッツにピン・ヒール

ユニクロパーカーにスニーカー

丸みを帯びたフラットシューズにロングスカート

大通りの夕刻は靴のラッシュ・アワー

靴が地上に溶けて張り付く夕刻

とどく とどけたい 声を 声に 一心に

……とどく とどいたしゅんかん

すんでゆくあね あね すでにそこにはいない あね

くちにするおかし くすり あかずに おかし

いのちをほしがらなくなっている いのち

気づかないまま じーつと ずーつと

あしたのじかん あさつてのじかん いまのじかん

しんじるのか

いのりのままに？

けれど そう

……晴れる

あしたは きつと

◆ 災厄にさいなまれ

有時秀記

巷に呼吸する家々のような平和は、一瞬の天津波でも崩れ、金融崩壊でも砂塵に消え、家庭崩壊でもついえ、不治の病でも崩れ、それにさも似た災厄でも崩れる。夢幻の実現に向けた楽しき日々のたたかいは、転落し、悪無限におちいり、循環の渦巻きを現象する。

そのとき意識はカタストロフィにさいなまれ、歯ぎしりを繰り返すかのような脱出を反復する。メールストロームに巻きこまれた船は、このカタストロフィの逆巻きをいやがうえでも身体に記憶し循環を循環する、という悪無限の立ち現れが現象する。

苦の世界の顕現は、しかし、それを超え出ようとするたたかいの反復を現象する。反復は知恵であろうか。やがて、人類の歴史に刻みこまれたカタストロフィの非望が、ヨブを、イエスを、ブツダを、ツラトウストラを、知と愛をもつて立ち現れさせたように、消尽の彼方に誠の聖家族の住む門を見いだす方途があるだろう。

悪無限に住む悪魔の誘惑をらくらくと逃れると思うのは、錯誤であり、偽善であるが、偽善の椅子に座るものは、それが偽善であることをおおかた知らない。それならば、偽善の椅子にはつばを吐き、復讐の山を超え、慈愛の門をくぐりぬけ、真理の椅子に座る道行きをこそ、悪無限のメールストロームから抜け出す比類ないメソッドと思念しておこう。比類ない私の椅子が夢幻の椅子として、現象し、顕現するのは、災厄にさいなまれたのちの山のいただきであり、そのとき、椅子は黄金の椅子である。

◆ K A E S H I
返 詩 3

大西隆志
富 哲世

⑦ 大西↓富

▼座興

あわて床屋が喉に剃刀をあてて微笑んでいた、つて本当かい
わたしらも、あちらの僕らも地図を見て
本居宣長の郵便札を買った船乗りの街から帰ってきたばかり
まあ、昼の秘密は幻の昭和四十九年を蘇がえさせてくれる
広場はどこにあったのか定かではないとされていたが
煙りが上がっていた先に

人事の言葉が馬鹿げているのに、それは素敵で
迷いの跛行を楽しんでいた
商店街には裸電球とハエとり紙がぶら下がり
日々の喧騒を貼り付けていた
年代別の蠅の死骸もあつたり
強力な糊はぼくらランボー少年を明るくさせた
いろいろな匂いが混ざりあい
灰は蠅でもあつた

科学小説は変身を容易にした
言葉が虫になったまま、形をなぞった日々

壁にチョークで川下りの方法を書いてしまったのは
あれはあれで正解だった

脱臼するのは決まったフリーズにしがみついたから

空ぶかしのエンジンみたいに

咳き込んでいたら

やってきたよ、友が

バンダナ巻いていたのですぐわかったが

風を運ぶ人は言葉も運んでいた

タンポポとチョウチョの邂逅を見つめる繊細な指は筆でもあつた

時には声帯の弦を弾き

海賊の末裔を誇りに引かれた国の境を自在に越えていたようだ

座興で運んでいた先には

互いの意志で結ぶ言葉の縁への

信頼があつた

⑧ 富↓大西

▼信頼

12頭身にはなれないよなあと思いながら
ぼくぼくと木魚の鳴る明るい草むらの
石の上で

詩人という種族が減んでいった晴れた朝

受話器を置いて

フリルのついたエプロンのリボンを首の後ろに結んでだいどこに立

てば

まるで死んでいったあの人がどこからかよみがえってきた奇跡のつもりで

古い思い出にも思わず挨拶なんかしたりして

なんとなく浮き浮きして

浮かんでいるようで嬉しい

(壊れるオモチャの上で

母はにかわ色に蠅たたきを鳴らした)

頭からつま先まで全身黒ずくめの影がベンチで脚を組んで

耳の大きな野ねずみのおしやべりをいっしょけんめい聴いていると

道の向こうからそふいあそふいあとうそぶいてバンダナ姿の君が歩いて来るのは

まるで山から降りてきた

神さまみたいだ

砂の丘の

十月の

解けない謎の

澄んだ空の下の半没の喉骨めがけて

沖のことばが押し寄せて来る

あのね、水に濡れた

小暗い水晶の惑星で、

〈あわて床屋が喉に剃刀をあてて

微笑んでいた〉んだよ

座って

砂糖壺を見つめながら

コーヒーを啜っている

白やぎさんからメールが来た

⑨ 大西↓富

まってよ。待つて下さい

やぎ座の彼女は手紙は食べないが、メールは咀嚼してしまうようだと聞いたことがある

やぎ座ってことじゃなく、彼女ってことに少し力をいれてだが、白

やぎさんか黒やぎさんかははっきりしない

天気予報のようなもので、時間をスリスリしながら近寄ってきた

とても良い傾向でもあります

最近、ローカルな雑誌を見ていたら

それも30年程前の文化誌

ぼくは生意気盛りで地域の山羊さんに渡す言葉を綴っているのを少し見下していた(馬鹿は自身だったのに)

白やぎさんから黒やぎさんへ

黒やぎさんから白やぎさんへと面々(綿々)と続くことの

波のような永遠に嫉妬していたのかもしれない

いつか途切れることの瞬間に

白やぎくんの大丈夫なからだの部分と

黒やぎくんの病んでしまったからだをつなぎ合わせると

阿修羅よりは優しいだろう斑やぎさんが声を上げる

悲しさのなかのそら豆の音

壁に穿たれる銃弾に似ていなくもないか

まあ、古い時代の戦時下の話だが

いまだに体の一部が反応してしまう

あの店の住人にそっくりで、拡散していた光の水面には〈許し合う〉

が翻っていた

はた迷惑な話だが、僕は旗を目指す遊びにげんなりしていた
進め、へこたれ

へこたれながら抜け道を探していた
滝だと思つたのが、電飾看板だったこともあり

車道と歩道の分けるための縁石には

何時も躓いているように

ポンコツを抱えているのだ

たがいに補うことはたやすいのに

むずかしくなっているのか

最近、誰かの手を握ったかしら

ことばを握ったかしら

⑩ 富↓大西

光り輝く物体が

暗い三日月を食べている

ほぼ東西に流れる起伏を直角によぎる

そのアスファルトの参与の根方に

老いた命がモザイクを接ぎ合わせるように

黄落の葉溜まりが広がる

例えば2、3の分かれ道のはたで世迷い言に実験室の耳でうなずき

おじやの夕食を摂る今日の日暮れの夢想のように

熊が木の実を漁るペンペン草に脚を擦り付けてバス停へと通り過ぎ

るかわりに

この黄金色のまだらの世界にどこまでも沈んでしまうこともできる
だろう

いつの間にか番号札が剥がされていて

いつもの場所が分からなくなっても

ウチは大丈夫だよ

そこは神様の通り道だからね

ウチはきつと大丈夫だよ

隠しきれないポンコツを唱えながら売り名以上のポンコツを名前の

後ろに隠しながら

かくしてワタクシタチ虫となつて歩む月光のガード下

悲しさのなかポンポン

豆のはぜる物音

悲しさなのかポンポンソラ見たことか芽吹くおと

へその樹がホクロの枝がざらつく皮膚の町外れからぐんぐん生えて

夜の星の囲い地のひとつに届いてしまう

他人の空似の雑沓のなか招待されたきみのベレエはどこか勇氣のよ

うだし

きみはまだ「門外漢のキチ」と呼ばれる郵便配達のひとつりだ

ゴート ゴート

まわる乳母車

ゆうら ゆうら 揺れるゆうれいの舟

ゆうり ゆうり岸を離れるシンドバッドの影のラムプ

たつた3センチのふかみに

きみのいちばん大切な魚がいて

かみもきみも

ことばを探している

前のめりな雨空のどこかで

じくじくじくと小鳥が囀ずり

靄に隠れた鳥影の先

はらはらと葉を落として

◆坂の町の冬——五十六年目のCへ(2012.11.23)

安西佐有理

坂道をのぼったりおりたり

手袋の中の手は

おりたりのぼったり

のぼったりおりたりしたあげく

東西にのびる路地へゆく

手袋の中の手は

一日の潮のにおい

一週間の落ち葉のにおい

一生をのぼったりおりたり過ごしてきた

坂の町のおいが染みる革の手袋から出て

路地に思いがけず待っているその店で

いつだと思いがけない

ひかりの手触りに出会うのだ

もはや煤けた泰西名画には描かれようのない

二〇一二年冬の夜、ゆくえしれずな黒の黒さ
ふるえる骨たちの奥深くにも

しずかに挨拶を送る、赤や黄の蝋燭の
ともしびの厚み

皿に盛られたなつかしみとあこがれが

あえかに青く昇華する

炎の滑らかさ

手袋から出た手らは

ひかりのゆらぎを雄弁な音楽に、あるいは

晴れやかな言葉にして

手と手

グラスを交わし

手と手

向かい合い

路地を出て

また坂道をのぼったりおりたり

おりたりのぼったり

のぼったりおりたり

(編集部注・この作品は、11月23日(金)の
スペイン料理カルメン創業記念56周年に
合わせて行われたフラメンコ・ギターと
バイオリンの演奏による詩の朗読会向け
にかは書き下ろされたものである)

うた 神戸詞あしび

66-2012.12 大橋愛由等



神戸を訪れた際に、長田区の「FMわいわい」にもゲスト出演した夏石番矢氏

俳人・夏石番矢氏が一月に神戸を訪れ、数日行動を共にした。今回の来神は、姫路文学館で芭蕉についての講演18日を行うために兵庫県に立ち寄る機会があり、そのついでに神戸にも足を運んだということである。

番矢氏は来神に先立って、第14句集『ブラックカード』（砂小屋書房）を上梓している。そこで私が同書の関西における出版記念会を開催する事務局を引き受けることになった。

その記念会として予定していた17日は、京都で大きな俳句の大会現代俳句協会青年部の知恩院におけるシンポジウムが予定されていて、私が呼びたい主な俳人、川柳作家のほとんどが京都に集結するという困難な条件のもとで出席者を募ることになった。

声をかけて応じてくれたのは、詩人たちであった。考えてみると、番矢氏の、周辺の表現者に対する歯に衣着せぬ舌鋒は、彼の異能ぶりを際立たせる所作につながっていると認めたとしても、彼がすべての隣人に対して温和なまなざしを向ける表現者ではないことは

二〇句選に現れた 詩人たちの個性―

詩人たちに迎えられた方が、番矢氏らしい記念会になるかもしれないと思っただけである。

それでもせっかく東京から神戸に来てくれるので、少人数であっても印象のこる会にしようと、一つの課題を出席予定者に課したのである。

それは、句集『ブラックカード』を読んでその中から二〇句を選句してもらい、私のもとに会が始まるまでに、メール送信するといったものである。それ

を当日に私がB4判裏表一枚のドキュメントにまとめて、会に臨み、それをもとに俳句論、番矢論を展開しようという企みであった。二〇句選を提出したのは、安西佐有理、大西隆志、大橋愛由等、倉橋健一、今野和代、富岡和秀、播磨公（唯一の俳人の各氏であった）。

この二〇句選の俳句は句集のページ掲載順にならべているのだが、予想しなかった事態がみえてきたのである。〈南へのかなしみ葡萄がゆつくり腐るかなしみ〉ゆるやかな坂を登れば記憶の家〉など複数の詩人たちが選んでいる句はあるものの、各自の選句だけを読んでいると、そっくりそのままその人の詩世界に転化が可能なのである。

倉橋健一氏は〈故郷に帰らず深夜小さな歯を失う〉〈肉体を着る老母はかなしみや雨を苦しむ〉など叙情性を感じ得る句を選び、今野和代氏は、〈すべては速度すべては密度すべては闇〉〈雨は怒りの灰を海へ流しわが仮眠〉といった詩としての勢いのあるものや感情が刻まれた句。大西隆志氏は〈犬のアパートで黄金虫のキス永遠に〉〈土を食べる少女の背中中は滝である〉といった生きていることの原初性を感じられる作品を。富岡和秀氏は物語性が香る〈風の首都ケルト十字へ歌う人〉〈空を流れる無限崩壊の闇の群れ〉など。安西佐有理氏は〈鸚鵡は覚えす「おとこ・おんな・し・むげん」〉〈虚偽の国の虚偽の小箱の中で眠る〉といった声や音がその句から表出してくるような作品を選んだ。

そして私が選んだのは、〈暖房完備の全教室にプラスチック人参ぶら下がる〉〈指令をほしいままに発する脂肪のかたまりの濡れた唇〉といった句。一句の中に、いくつもの表現要素がぶつかり合い混住しているように思えるが、私なりに読み込んでいけば、一句として収斂していくといった読みを拒絶する作品であったり、あるいは多様な詩語の共棲は、なにかの言い換えである可能性があり、あるいは句全体がそれ自体で意味を形成するのではなくて、なにか他のモノ・コトを表象しているかもしれないのである。

こうして選択した私の二〇句について、自分では分からないものだが、ほかの詩人たちからすると、「これはあなたの作品世界と似ている」と評されたのである。こうした詩人たちの読みの多様性を許容するのも、番矢氏の句がもっている自在さゆえのものであることを深く感じ入っていたのであった。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.77

めらんじゅ

2012年12月02日 通巻77号★

月刊『Mélange』編集部発行所

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

大橋愛由等（『Mélange』同人）

Mobile 090-5069-1840

maroad@warp.or.jp

定価 500円（税込）